

# デイヴィッド・ジンマン

チューリヒ・トーンハレ管と長い蜜月の月日を送っている指揮者のデイヴィッド・ジンマン。現在、同管とのマーラー・ツィクルスが進行中で、この9月には本拠地チューリヒのトーンハレで3日間にわたり「交響曲第7番」を指揮した。再来年には日本ツアーも予定されている。チューリヒでのリハーサルの合間、ジンマンにマーラーについて話を聞いた。

## David Zinman

交響曲第6番には、運命に必死に抵抗しているマーラー自身の姿が投影されていて、彼の人生を予言しているかのようです。終楽章の3回のハンマーの打撃は、ウィーンのオペラ座の職を追われたこと、娘の死、自身の心臓病を表しているのです。

取材・文=中東生

Text=Shinobu Naká

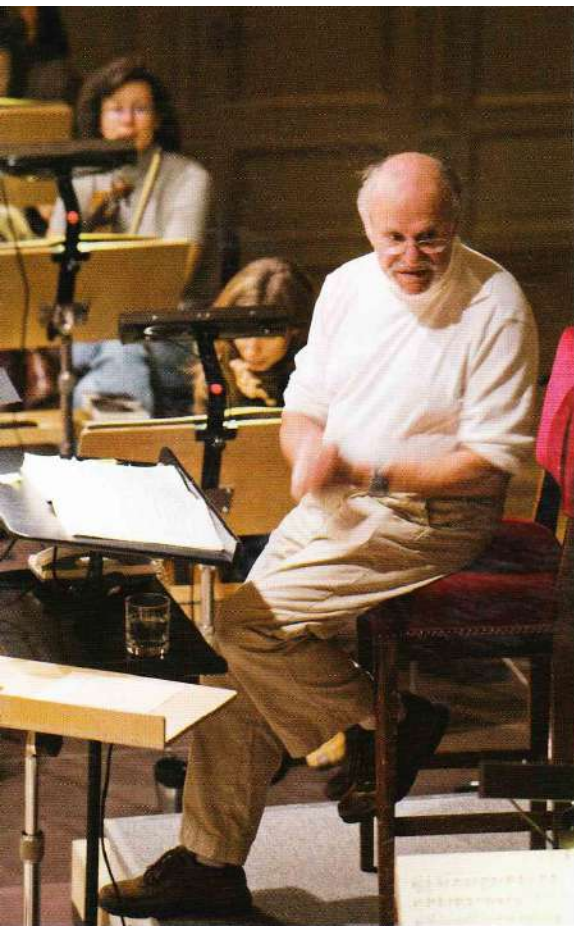
©Josef Stüker/Tonhalle-Orchester Zürich

1年の休暇を経て、ジンマンがトーンハレに帰って来た。大盛況の3日連続コンサート（9月17日〜19日）に続くマーラー「交響曲7番」の録音は、土日を挟んですぐに始まった。身の引き締まるような冷気を含む朝の空気と同じように、団員たちは30、40分も早く、ポジティブな緊張感を携えて集まってくる。唯一、楽しい笑い声が途絶えないのがミキシングルームだ。ジンマンとは20年来、トーンハレ管ともジンマン就任以来の付き合いになるという名レコーディング・ディレクターとエンジニアのコンビは、今回も周りの緊張をほぐそうと、連なって座るジャーナリスト陣にまでリップ・サービスを振る舞うのが居心地よい。

まずは一番人数が必要な5楽章から録音が始めるが、このチームのいつもの録音方法として、一度全部通して、それを各楽器のリーダーがミキシングルームに集まり、自分の耳で録音を聴いて、自分でOKかダメ出しをするという方法を取っている。マエストロもレコーディング・ディレクターも「こちらがいろいろな言葉で表現して修正させるよりも、早く正確で効率的な方法だ」と気に入っている。その他、ディレクターが小さなズレも見逃さず、チェックする姿は神業だ。マエストロも「オケのと真ん中にあると細かい部分まで聞こえないから」と、完全に頼りきって、何度も繰り返し最高の音を探っていく。これだけの信頼関係の上に築かれたこれらの録音が上質なのは当たり前だと、改めて感じた。

2日目の夕方に行われた録音の前に、マエストロにお話をうかがった。





1995年からチューリヒ・トーンハレ管首席指揮者を務めるジンマン。2006年6月、ヨーヨー・マをソリストとして同管と2度目の日本ツアーを行ったことはまだ記憶に新しい。ジンマン&チューリヒ・トーンハレ管との次回来日公演は、マーラー没後100年にあたる2011年で調整が進んでいる ©Priska Ketterer/Tonhalle-Orchester Zürich

——チューリヒ・トーンハレ管弦楽団とのマーラー・ツィクルスは、交響曲の番号順に演奏会をし、録音がそこに緊密にリンクしていますが、マーラーがこの世に生み出した順をたどることによって見えて来たことはありませんか。

ジンマン(以下、Z) もちろんあります。それぞれの交響曲はマーラーを主人公とする小説の各章のようなもので、密接な関係性を持っています。マーラー自身の成長に合わせて、順を追って演奏することは大変意義あることです。それから、例えば交響曲第1番《巨人》で難しかった部分は、第2番《復活》でも難しいわけですから、それを解決するために、段々マーラーのスタイルというものを学んでいくことができます。そして、作品成立順に取り上げることによって、それぞれを対比させながら彼の考えの移り変わり、彼のアイデアがよく理解できる。《巨人》で始めたことが交響曲第10番で解決されたりする。勉強しやすく、理解しやすく、表現しやすくと三拍子揃って

います。これが私の人生の3回目のマーラー・ツィクルスですが、番号順という贅沢な理想を実現できたのは初めてです。

——マーラーの音楽とジンマンさんのフイーリングがピタッと合っているように思われますが。

Z もちろんマーラーという人物をどう解釈するかが問題です。私はマーラーに関する書籍を数多く読み、スコアも隅々まで読んで、今でも新しい発見をするくらいです。それらを元に、オーソドックスな表現を試みています。感動を追求するのではなく、彼が何を考えていたかを追求するようにしています。マーラーは20種の録音を聴くとすると、20通りの解釈が出てくるような作曲家です。彼は非常に純粋な人間でした。人間とは何か、生と死についてつねに問いかけていました。従って、彼の音楽も澄んだ純粋さがあるのです。彼の生前は、指揮者としては優秀ですが、作曲家としては無力だと評価されていました。マーラーはそれに打

ちのめされるのですが、現在は優れた指揮者であり、作曲家であることは周知の事実です。

——交響曲第6番は、マーラーの個人的な感情が最も強く投影された作品の一つのように思えますが、いかがでしょうか。

Z 実際に、運命に必死に抵抗しているマーラー自身の姿が投影されている曲で予言的でもあります。そして「起り得る」<sup>1</sup>として書かれたものが、実際に起こってしまうのです。3回のハンマーが表すのは、ウィーンのオペラ座の職を追われたこと、娘の死、自身の心臓病なので、3回目は実際には打っていません。それが訪れた時には、もう死んでいて聞こえないはずですから。

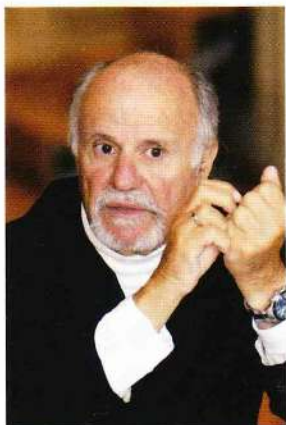
——今までの録音をジンマンさんご自身はどう捉えていますか。

Z 若い頃のものには、聴くのも恥ずかしいものもありますが、トーンハレ管との録音には毎回完全に満足していて、やり直せると言われても、変えたい部分がありません。ライブ録音の場合、どうしても大袈裟になってしまったり、客席の雑音が入ったりしますが、録音というものは何度も繰り返し聴かれるということ

を前程に、より繊細な表現が必要とされ



【写真上】ジンマン&チューリヒ・トーンハレ管のレコーディング風景。11月にはマーラー「交響曲第6番(悲劇的)」がリリースされる(BMG JAPANより)。スコアにはこだわりを見せるジンマン、マーラー「交響曲第6番(悲劇的)」の使用楽譜はカール・ハイント・フェッスル校訂・全集版(1998年)  
【写真下】チューリヒ・トーンハレの外観



インタヴューは、チューリヒ・トーンハレで行われた。来年1月にはN響定期に客演が予定されているジンマン。ショスタコーヴィチ「ヴァイオリン協奏曲第1番」(ヴァイオリン:リサ・パティ・アシュヴィリ)、シューベルト「交響曲第8番(ザ・グレイト)」、ウェーベルン「パッサカリア」、マーラー「交響曲第10番」〜「アダージョ」、R・シュトラウス「交響詩(ツァラトゥストラはこう語った)」などを指揮する予定 ©Josef Stucker/Tonhalle-Orchester Zürich

ます。また、マーラーの交響曲などは、演奏家も疲れてしまうので、難しい部分から録ったり、休ませてから録り直したりできる録音は便利です。テンションが低下していても、「ここでテンションを爆発させて」などと指示を出せばできるので、このレコーディングスタイルが気に入っています。

マーラーの交響曲と共に、トーンハレ管弦楽団の描くマーラー像も成熟してきました。読み始めた小説が読み終わるまで心を占領してしまうように、トーンハレ管のマーラー・ツィクルスも完結するまで目が離せない。